

永 久 平 和

石原莞爾自筆

第138号
(平成28年10月25日)

目次

巻頭言	1
日本統治時代の台湾	1
仲條江里子	1
★太平洋戦争と石原莞爾	2
野村乙二郎	2
●石原莞爾の「戦後」を歩く⑧	4
●昭和天皇の御製⑬	4
岩崎章次	4
◆【連載】	
蟹気楼の国・満洲国(最終回)	6
坂本進一	6
●会員便り	9
●SNS	10
●コラム	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

日本統治時代の台湾

―「台湾の塔」建立に寄せて―

広報部長 仲條江里子



沖縄戦の追悼施設である糸満市の沖縄県平和祈念公園に台湾出身者の戦没者を祀る「台湾の塔」が完成しました。沖縄戦が終結してから71年、日本と台湾の平和や友好を発展させる場所にしたとして、関係者は完成を喜んでいました。

台湾の世論調査では半数以上が「最も好きな国は日本」という結果が出ているというので、嬉しいことです。

日本は日清戦争に勝利し、台湾を50年もの間統治することになりますが、日本統治時代になってから台湾は本格的に開発されていきました。

当時の台湾は衛生状態が劣悪で、特に飲み水の病原菌汚染が酷く「台湾の水を5日間飲み続けると死ぬ」と言われていたそうです。そこで日本人は近代的な上下水道を作り、烏山頭ダムや用水路などを建設しました。それらを命がけで作ったのが八田與一という人物です。ダムは東洋一と呼ばれ、その規模は黒部ダムの75%に相当しました。八田は、ダムのみならず、農業も展開するのです。

八田ダムの水で灌漑できる畑は5万haだけでしたが、八田は「三年輪作法」という、農作方法を思いつきます。それは1年目には稲を栽培し、2年目にはあまり水を必要としないサトウキビ、そして3年目には水をまったく必要としない雑穀類の栽培をするという輪作農法です。これにより15万haの耕地を灌漑することがで

き、米栽培や砂糖栽培が飛躍的に成長し、八田與一による一大水利事業はやがて大穀倉地帯へと生まれ変わりました。

八田の農業水利事業により周辺には2000人の従業員とその家族が住みついたそうです。「良い仕事は安心して働ける環境から生まれる」という八田の考えから、従業員宿舍や、学校、医療施設までもが建設されました。人間関係を大切にし、台湾人にも分け隔てなく接したことから多くの人が彼を慕っていたそうです。よく作業員の宿舍に上がり込んで、彼らと花札に興じていたという話もあります。人物としても、大変魅力的だったのでしょう。

八田與一の偉大さは、技術が優れている上に、農民が幸福になるためには何が一番必要なのかを常に考えていたからではないかと思うのです。

そんな八田の功績に対して、烏山頭ダムの湖畔には地元住民によって建てられた八田の銅像があり、現在でも八田の命日には毎年地元住民による感謝と慰霊が行われているそうです。

また、製糖業に尽くした新渡戸稲造は半年をかけて台湾全島を巡り、殖産興業の要は製糖業にあると確信してからは諸国の製糖設備を調査してサトウキビの品種改良や栽培法、製造法について学び、台湾糖業は新渡戸の改善策により大いに発展していきました。

多くの日本人が台湾の経済を支え、文明化に命を賭して挑んでいった姿にとっても感動します。

日台間には現在に至るまで大きないさかひもなく、友好関係を築いているのは、統治時代に台湾のために尽くした日本人たちの努力があったからこそと思うのです。

▼その①

高速増殖炉「もんじゅ」、97年12月のナトリウム漏れ事故以来事実上稼働しないまま二十年近く経過し、その間、維持費だけで年間二百億円前後、たった一日分で五千五百万円相当の新築マンションが買える計算になる。なぜ廃炉決定まで二十年も費やしたのか。表向きは管轄官庁の文部科学省が画餅に過ぎない核燃料サイクルに固執したということなのだろうが、根はもっと深いところにあつたのではないか。

核兵器の素材として語られるプルトニウム（以下、Pu）であるが、「もんじゅ」のような高速増殖炉から生み出されるPuは、一般的な原発の軽水炉から取り出したPuと比べ、核爆発をするPu239の含有率が極めて高く、しかも逆にまともな核分裂を阻害する同位体のPu240が極めて少ないという「優れた」特質がある。そのため「もんじゅ」を存続させることで表向きはともかく、本音として核武装、少なくともその技術的素地は存続させたいという日本政府「奥の院」の意向があつたようにも思えてくる。

核時代を生きる国家群にとって、核抑止力は安全保障上魅力的なものだ。年初から立て続けに行われている北朝鮮の核実験や弾道ミサイル発射は、「生残り」を目的とした核抑止力確立のためであり、同様に日本も核大国・中国への対抗上、核保有を安全保障の選択肢の一つにしたい「本音」があるのかもしれない。

しかし、私は日本の核保有には反対である。なぜなら、北朝鮮の金王朝の最大関心事は体制の存続であり、そのために自国民が何百万人死のうとも意に介さないだろう。また中国指導部は核戦争で仮に一億人死んでもまだ何億人も生き残っているという認識をしていた時期がある。そのような国家に核抑止論が通じるとは考えにくいし、それどころか中朝の対日歴史認識のトラウマやルサンチマンからかえって先制核攻撃さえ招きかねないと懸念するからだ。

▼その②

衆議院選挙の小選挙区制導入来、選出された国会議員の質が年々劣化しているように思えてならない。国会議員は、地方選挙で選出される都道府県、市議会、区議会議員とは違い、国政を担うべく選出された選良のはずである。

しかし、各選挙区で一人しか選出されないで、当然ながら「地元優先」の立場になりがちになるし、党から公認をもらえないと当選がおぼつかなくなるので、候補者独自の主張や公約がしにくい傾向にある。安倍一強と言われる背景にはそのような選挙制度があるように思える。

その安倍総理にしても、彼の言動を見聞きしていると、「昭和の妖怪」と言われた祖父の岸信介元総理と比べ、あまりにも幼稚との印象を拭えない。岸には毀誉褒貶は別として、歴史観や日米関係についての相当な知識とそれに裏打ちされた信念があつたと感じられるが、安倍総

理からはそのような知識も思考も相対的に乏しいと感じざるを得ない。

同様のことが各々の閣僚についても言えよう。一九六〇年の日米安保改定で、岸は当時の赤城宗徳防衛庁長官に自衛隊の治安出動を要請した。しかし赤城は「自衛隊を国民の敵にしてしまふ」と断固反対した。現行の日本国憲法下では総理大臣は自衛隊の最高指揮官でもある。因みに民主党政権下の菅直人総理はそのことを「知らなかった」と笑いながら語った。したがって赤城長官は抗命の咎での解任を覚悟していたであろう。しかし、岸は彼を解任しなかったし、自衛隊も治安出動しなかった。そのことで自衛隊は「救われた」と思う。その赤城の孫・赤城徳彦も第一次安倍内閣で農林水産大臣のポストについた。そう、あの絆創膏大臣である。

(山崎)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353(山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第138号 平成28年(2016年)10月25日発行